

みちのくだより

秋田県地質調査業協会の特徴

秋田ボーリング(株)
福岡 政弘

秋田県は地下資源に恵まれた県であった。県南、県北、中央の各所に金、銀、銅などの鉱山があり、銅の算出量日本一を誇った時代もあった。加えて石油の産油県でもあり、明治初期から昭和の始めまで秋田市郊外には百を越える石油槽が林立していたものである。

しかしすべては過去形である。今は往時の面影は全くない。

しかしその名残と伝統は今日の新しいタイプの産業、つまり地質調査業へと引き継がれてきている。

秋田県地質調査業協会の会員数は現在20社足らずではあるが、その最も古い会社の創業は1914年(大正3年)である。石油掘削のために新潟県から移住した会社であった。

老舗のボーリング会社からは時代の要請に応じて暖簾わけ枝わかれしていった会社の数も自然増の形で増えていった。

このような地質調査産業のグループ形成の性格上、その長幼の序列も明らかなどころから

今日のこの不況の時代も結束が乱れることなく統制が保たれている状況にある。

秋田市西部を流れて日本海に注ぐ雄物川という一級河川がある。

同じく秋田市北部から市街地を南に貫流する旭川があり、この両河川が市の中心部で合流するところから秋田市は古くから水害に悩まされていた。これを解消するために雄物川改修工事が当時の内務省と秋田県の直営工事として大正6年に起工された。完成まで22年を要した大土木工事であった。

この工事に秋田県としては初めて米国より輸入したボーリング機械による地質調査が採用された。

この事によって秋田県は期せずして昭和の初期より地質調査に関する技術職員を擁することとなった。

産業、行政両面における以上の歴史的背景が今日の秋田県地質調査業協会を支えているのではないかと自負している。

みちのくだより

地吹雪と砂丘

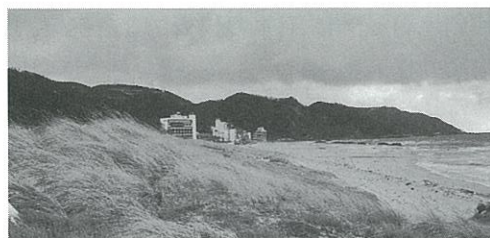
(株)新東京ジオ・システム
高田 泰英

『ちふぶき』をご存知ですか?冬の庄内地方の名物です。食べ物ではありませんよ!

強烈に横殴りに吹付ける粉雪……が『地吹雪』です。飛ばされそうな猛吹雪では一寸先が見えなくなるのです。身を刺す寒風と渦巻く雪粒で白濁濃霧のような世界です。

普通山形県は地形的に二分して内陸盆地と庄内平野とに分けられます。私の住む鶴岡市はこの庄内平野に含まれ、四季を通じて山々が美しく見え、その代表的な山が月山と鳥海山です。それぞれ庄内平野の南方と北方に位置しています。西方は日本海に面しています。

庄内海岸は北から遊佐町、酒田市、鶴岡市、温海町と続き鼠ヶ関までの約60kmに渡ります。吹浦から湯野浜までは長さ約35km、幅1.6~3.2kmの砂丘海岸で、この砂丘は日本三大砂丘の1つに揚げられています。



冬の庄内海岸(砂丘より湯の浜温泉を望む)

さて、『地吹雪』に戻りますが、この西方が日本海に開放されている地形が原因です。冬期間の季節風、北西風のシベリア寒気が地吹雪のエネルギーなのです。降雪後のふわふわした新雪で結合の弱い状態の時に強風が吹くと多発するのです。

完全に地表が雪に覆われた鶴岡市街地周辺は雪の地吹雪ですが、積雪の殆ど無い海岸部では同条件下で砂混じりの地吹雪になるのです。この強風が『飛砂』をもたらし、砂丘を形成する力になっているのです。

夏季に比べて砂は湿っていて飛びにくいのに、雪の上に50cmも積もることもあるのです。それほど冬の季節風は強いのです。そして、その飛砂の源は海底から海岸に寄せられ堆

積した砂です。庄内浜の海底は海岸から沖へ深さ120~180m位まで平均1~2°の傾きで砂が大陸棚に広がっています。この砂は最上川や赤川等の河川が鳥海山や月山から運んできたものです。春先の雪解け期には大量の土砂により最上川の色が茶色になり酒田港と飛島の間付近まで海が変色しているそうです。

小雪が降り出してきました。天気予報によると第一級の寒波がやってくると言っています。明日あたり地吹雪になりそうです。また庄内砂丘が成長するのだろうか？

皆さんも一度は“地吹雪体験”に庄内にいらしてみてください。

みちのくだより

岩手の湘南から椿の里便り

(株)菊池技研コンサルタント
新沼 正彦

岩手県の南東部(大船渡市と陸前高田市)は、冬でも雪が少なく内陸に比べ暖かいので、岩手の湘南と呼ばれている。そのため、北限とも言われる自生のヤブ椿がいたるところに生育し、それらが冬には一斉に花を咲かせる。気仙地方の代表的観光地である大船渡市の碁石海岸には、世界の椿(13カ国260種)を一同に集めた「世界の椿館」が近年建てられ、大船渡市立博物館とともに観光名所となっている。

さて、気仙地方と言えば、南部北上帯に属する古生代の地層が広く分布しており、南隣の宮城県気仙沼・本吉地方に分布する中生代の地層とともに、日本の代表的な古生層・中生層の模式地となっている。我が社そばの堤防に立って北から西の方向を見回すと、古生代シルル紀~ペルム紀、中生代三畳紀や白亜紀の地層が分布する山々が間近に望める。このように当地域は、古生代・中生代の堆積岩類が広く分布しているため、大船渡市立博物

館や陸前高田市立博物館には、地元産の化石標本が数多く収蔵展示されている。そのためか、大船渡市立博物館は、内外の研究者の来訪も多い。

気仙地方は、旧気仙郡の二市二町(大船渡市、陸前高田市、三陸町、住田町)で構成されていましたが、平成13年11月15日に大船渡市と気仙郡三陸町が合併し、人口45,000人余の新生「大船渡市」が誕生しました。合併については、前からいろいろあったようですが、約1年前に具体化し両首長の合併推進の合意から僅か10ヶ月、まるで「合併が既定路線」であるかのように、「新幹線のぞみ」が疾走する勢いそのままの見事なまでの速さで三陸町と合併してしまいました。お役所の仕事もこのように迅速果敢に処理すれば、狂牛病騒ぎや薬害問題などは起こらなかったのではないかと、思うこのごろです。これから冬本番となり、我が椿の里も「椿の花」と冬の魚介類の美味しい季節となります。

